

前書き

僕はテキサス出身だ。ヒューストン生まれ、ダラス育ち。小さいときから、三つの事をよく覚えている。一、テキサス州の夏は長くて極めて暑い。四月初めから十月末まで、ずっと暑くてたまらない。夏の盛りは昼は約40度、夜も35度と下がる気配はない。雨は降らず、雲も殆どない。サハラ砂漠とはいかないまでも、砂漠の気候に似ている。二、気温だけでなく、政治も宗教も圧倒的に極端な超鷹派。テキサスの政治家もキリスト教会も非常に保守的だ。とにかく柔軟性がない。三、大きい。何が大きいかというと、面積だけでなく、家も車も道もメンタリティも、テキサスでは全てがばかでかい。

テキサス州の面積は、その当時のアメリカで最大だった。昭和34年に州となったアラスカが一番となり、テキサスは今では二番目だ。しかし、やはり巨大なことには変わらない。面積は70万平方キロメートルで、日本の本州が23万平方キロメートルだから、テキサスに本州が三つ収まる。南のメキシコとの国境から北のオクラホマ州までの距離は約1,300キロで、東から西への距離は1,250キロ。人口密度も比較すると、テキサスは1平方キロ当たり35人、日本は1平方キロ当たり320人で、日本はテキサスより十倍の人口密度を有する。テキサスに日本の人口密度があったら、全米人口がテキサスに入ってしまう。テキサスの人口は2,500万人で(約日本の四分之一)、人口4,500万人のカルフォルニア州に次ぐ米国二番目の州人口だ。周

辺の長さを見ると、テキサスも日本全体も(本州だけでなく)大体同じで、約**5,500** キロである。

これは昔のお話。あるテキサス人が亡くなって天国に昇った。テキサス人を歓迎するため聖人ペテロ(いわば天国の支配人)が表玄関まで迎えに出て、「天国には一番長い川があり、一番高い山があり、一番明るい星もありますよ」と言って彼を案内した。「どうですか?」と誇らしげに訊ねた。テキサス人は、「あまり大した事ないね。テキサスにはもっと長い川、もっと高い山、遥かに明るい星があるよ。」そこで、ペテロがテキサス人を天国の端まで連れて行き、ずっと下の方で燃えさかる地獄の業火を見せ、「テキサスではこんなすごい火事はないでしょう?」と訊ねた。暫く黙っていたテキサス人がこう言った。「おっしゃる通り、ありませんね。しかし、大した事ないよ、あれは。でも大丈夫だ。ダラスに住んでいる旧友がお宅の大火事をあっさりと消してくれるから!」

僕の祖先はドイツからの移民だった。19世紀半ば頃、曾祖父がドイツの南部バイエルンのミュンヘン近くシュエービシュ ハールという小さい町から移住し、中西部のミズーリー州に行き、多くのドイツ人が既に植民していたセントルイスに居を構えた。同市にはドイツ系バドワイザー ビールの本社もあった。明治2年生れの祖父は医者で、ハイデルベルク大学を卒業して、セントルイスで有名な小児科医になり、同市のワシントン大学で医学を教えた。父は大正一年セントルイス生まれ、同市育ち、同ワシントン大学を卒業した。同大学院で会計学を中心に修め(専門は石油会計)、

修士号をとってから、国家試験で二番という高得点で会計士になった。世界一のプライス・ウォーターハウス会計事務所に入社し、石油会計の専門を生かし、昭和14年にテキサスのヒューストン支社に転勤となった。僕は、昭和16年の真珠湾攻撃三ヶ月ほど前に同市で産まれた。昭和25年に新支社を設立するため、父はヒューストンからダラスへ家族と共に転勤となった。その頃、今では最大手の半導体、プロセッサメーカーであるテキサス・インストルメンツは、まだ微々たる企業だった。

ダラスはその時から、無邪気な又は風情のない所だった。小さくて、文化もなく、歴史も浅く、綿織物の流通の中心として知られているくらいだった(原油井戸と埋蔵量は東と西テキサス、精製所は南テキサス主としてヒューストン)。ダラスといえば、昭和38年11月23日のケネディ大統領の暗殺で一番よく知られている。あまり知られてないかもしれない事は、アメリカの反共産主義および超保守的南バプテスト教会の本拠地ということだ。米南部と同様に反社会主義、反ユダヤ、反黒人という偏見が渦巻いている。粗野なマナーと歴史の浅さ。文化の深さなどは単に2センチほどと言えよう。例えば、芸術家を誉めることなどちっともないが、美術を買い漁る金持ちをやたら敬う。半分冗談ですが、ダラス動物園とニューヨークのブロンクス動物園という世界でも一番有名な動物園を比べると、ブロンクス動物園は動物名をおりに英語とラテン語の学名で記す。ダラス動物園では英語名と調理法が記されている。そして、この歴史のない、文化の浅

い、超保守的な、粗野なマナーの都市が僕の古里となった。

ドイツの国、国民、そして文化の三つの特徴を挙げると、まず第一に非常に合理的。第二に超生真面目な国民。第三にユーモア(笑う能力)が殆んどない[僕の家族は例外かもしれないが]。とにかく、ドイツ語は言葉として美しくない。フランス語が詩文と愛と料理の言葉であれば、ドイツ語は哲学者と酷いオペラと命令の言語だけだ。一つの具体的例を挙げると、16世紀、スペインのフィリップ国王に、「陛下は、何国語をお話しになられますか」と記者がある日訊ねた。フィリップ国王はこう答えた。「うむ、余は4ヶ国語を話すよ。余の国民とは勿論スペイン語だ。ローマ法王に謁見する時にはラテン語、そして言うまでもないが愛しい恋人と愛の言葉を囁く時はフランス語だ。最後に、余の馬に命令をする時はドイツ語を使うのだ。」

ドイツ語の名前には、いろいろなニュアンスが含まれている。祖父の名は「アドルフ」で父がアドルフ-II(2世)、僕はアドルフ-III(3世)になるところだったが、例のアドルフが1930年代に台頭してきた。そう、ヒットラー、ドイツ国家社会主義の独裁者。言うまでもなく、僕はアドルフ-III(3世)にはならなかった。であるにもかかわらず、小学校でも中学校でも同級生にいつも「おーい、ナチ公。おやじもヒットラーも同じ名だ!」とか「ドイツに帰れ!」とか「ネオナチ野郎」などと呼ばれた。どこでも同じだが、テキサスの子も卑劣だ。ドイツの血は僕の血管に永久に流れる。

「城石」という名は純粋なドイツ系の名前で、「城」は「シュロス」で、ドイツ語で「Schloß」と書く。「石」は「スタイン」、ドイツ語の「stein」、合わせると「Schloßstein」になる。その結果、日本語では「城石」となり、日本では城石と申します。家族はずっと昔から新教徒の長老派教会の信者で、亡母は毎週日曜日に信者6,000人を抱えるダラスの最大ハイランドパーク教会に通った(友達を見るようも友人に見られるようかもしれない)。僕も亡父も、不可知論者だった。ところで、ユダヤ人にも多くのドイツ系の名前がある。例えば「ゴールドスタイン」とか「ワインスタイン」とか「アインシュタイン」などがそうだ。小さい頃、ダラス市にはユダヤ人に対する強い偏見があったから、しばしば僕たちも経験せざるをえなかった。とにかく保守的で、寛大さや寛容さには欠けていた。テキサス州は無論、19世紀の南部連邦の一州だった。

テキサスに話を戻すと、歴史の浅い州ながら実は「六つの国旗」があったのだ。なぜかと云うと、以下のようだ。

- 1) スペイン (1519~1685、1690~1821)、スペイン国王が米中部のミシシッピー川からずっと西海岸までの領土を植民地とした時代 (ロサンゼルスもサンフランシスコもスペイン語の都市名)。
- 2) フランス (1685~1690)、スペインを打ち破った。
- 3) メキシコ (1821~1836)、フランスを征服した。

- 4) テキサス共和国 (1836~1845) 、有名なアラモ砦の争いで、メキシコを破った。
- 5) 南部連邦 (1861~1865) 、もちろん南北戦争だ。丁度「風と共に去りぬ」時代だった。
- 6) 最後に、米国 (1845~1860 、1865~現在に至る) 。

注: 六つの国旗と言えば、「シックス・フラッグス」(Six Flags) という遊園地会社がダラスに昭和35年に開園して以来、今日では全米21ヶ所に展開する最大規模の遊園地となっている。ディズニーランドと同じようなものだが、ミッキーもミニーもドナルドダックもいない。

先程テキサスの夏は長い、極めて暑いと書いたが、以下の昔の冗談に近い民話がある。一、卵が体の中で堅くゆだってしまわないよう、夏になると農家はニワトリに氷を食べさせる。二、アスファルト道路が溶けて液体になる。三、テキサス人が死んで地獄に下ると、閻魔大王が「ここは極めて暑いだろう」と言った。テキサス人は頭を横に振って、「いや。まあ、春みたいですかね」と答えた。四、聖書に因ると、ノアの箱舟の時代、雨が40日間40夜降り続いたのに、テキサスでは約半センチくらいしか降らなかった。五、水・お湯の栓両方からお湯が出てくる。六、知性に関しては、テキサス人がテキサス州から北のオクラホマ州に引っ越すと、両州のIQが上がる。七、テキサスの文化が浅い訳は、主としてメキシコ料理を起因するからだ。例えば、テキサス人はタコスとかハラピーニョスとかチリシチュー等を殆ど毎日喰う。

ここで、愛しい読者の皆様には、質問がおありでしょう。「ドイツ系のテキサス人で城石という奴が、どういうわけで歴史が極めて短く、文化が圧倒的に浅いテキサス州から長い歴史と深い文化を誇る東洋の国、日本に来るに至ったのでしょうか？」

と思われる方、まあ、言わせて頂ければ、是非引き続きお読み下さいますようお願い申し上げます。